

昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における 仮名導入前の日本語指導について

園 田 博 文
(地域教育文化学部)

山形大学紀要（人文科学）第19巻第3号別刷
令和2年（2020）2月

昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における 仮名導入前の日本語指導について

園 田 博 文

(地域教育文化学部)

1 はじめに

園田(2012)では、日清戦争終結直後の明治28(1895)年に刊行された台湾語会話書を主な資料として使用した。これらの資料は、通訳官等が独自に調査した台湾語を日本語で記したものである。台湾語を理解し使用するためのものであり、台湾語の発音には日本語の片仮名が当てられる。当時あまり知られていなかった台湾語を研究するための資料として貴重であるばかりでなく、日本語の資料としても活用できることを示した。台湾では、同じくこの明治28(1895)年から日本語教育(国語教育¹)も開始されることになる。その後、内地では、明治37(1904)年4月から昭和24(1949)年3月まで使用される『国定読本』(第1期～第6期)が編まれる。台湾では、これに先駆けて、明治34(1901)年から用いられた『国語読本(国民読本)²』(第1期～第5期)(昭和20(1945)年終戦まで使用)が編纂された。

このように、台湾における公学校の教育は整うのだが、一般民衆への積極的な国語普及政策は昭和に入ってからである。未就学者に対する国語講習所が設置されるのも昭和4(1929)年である。設置後しばらくは、各講習所独自の教科書が使われ、定まったものはなかった。昭和7(1932)年6月になると、「国語普及の三大雑誌」と称された『国光³』『黎明』『薫風⁴』という月刊誌が創刊され、特に『国光』は国語講習所で重用された。

昭和8(1933)年に国語講習所用教科書である『新国語教本』が刊行され使用されるよう

¹ 吉岡(2012)は「台湾の戦前の言語教育の中心となったのは学校教育においてであったため、『国語教育』と言われることが多い。しかし、少なくともその初期において、日本語を母語とせず、日本語で互いにコミュニケーションもとれず、日本の生活習慣などについての知識もない学習者が対象であったことを考えると『日本語教育』と呼んで差支えないであろう。しかし、五十年の全期間を日本語教育とっていいのかわかり、そうでなければいつから国語教育とすべきなのか、この二つを区別するものは何かなど、なお明確にしなければならない問題であろう」という。母語話者に対する国語教育、非母語話者に対する国語教育、非母語話者に対する日本語教育という分類も可能かも知れない。母語教育か第二言語教育かという言語学的な視点のほか、言語政策、国民精神といった点も加味する必要がある、すぐに結論が出せるものではない。本稿では、日本語教育(国語教育)というように示した。

² 第1期は『台湾教科用書国民読本』、第2期は『公学校用国民読本』、第3期・第4期は『公学校用国語読本』、第5期は『コクゴ』『初等科国語』である。

³ 揚妻(2012)、園田(2020)参照。

⁴ 『薫風』創刊号から数えて第103号からは、誌名が『青年之友(青年の友)』と変わる。この改題誌第1号は、昭和16年1月5日発行である。

になる。『新国語教本』についての研究には、陳（2006、2019）、藤森（2016）がある。これらの研究により、政策や制度、国語講習所生徒数、教科書発行部数といった面の解明が進んだ。現在は、『新国語教本』に現れる詳細な言語の分析ができる段階にまで達したと言えるであろう⁵。

本稿では、国語講習所用教科書である『新国語教本』および『新国語教本教授書』を研究対象とする。この『新国語教本』および『新国語教本教授書』がどのように成立したか、また、どのように昭和9年以降刊行される教本類に影響を与えたかを明らかにすることが本稿の大きな目的である。この大きな目的に迫るため、まずは、仮名導入前の日本語指導の様子を垣間見ることにする。

2 『国光』『黎明』『薫風』と『新国語教本』

『新国語教本』には、台湾の『国語読本（国民読本）』や内地『国定読本』、朝鮮『国語読本』とほぼ同じ内容の課があることが知られている（藤森 2016）。ただ、詳細な影響関係については、それほど分かっていないようである。園田（2019b）でも触れた「国語普及の三大雑誌」である『国光』『黎明』『薫風』は昭和7（1932）年6月創刊でありしかも毎月発行されている。創刊から1年半ほどの昭和8（1933）年12月に発行される『新国語教本』（旧教本）が世に出るまでに、『国光』『黎明』『薫風』は各18冊合計54冊発行されている。『新国語教本』『国光』『黎明』『薫風』ともに台湾教育会発行のものであるので、影響関係があると思われる。少なくとも関連はあるはずであるが、管見の限り、これまで言及されたものを見たことがない。

『新国語教本』（旧教本）代表者の三屋静は、『薫風』創刊号編集委員7名（三屋静、横尾広輔、及川優曹、横山農夫志、許潭、後藤きん、柴山武矩）のうちの筆頭者である。また、『新国語教本』（改訂版）代表者の加藤春城は、『黎明』編集委員9名（加藤春城、谷垣藤三郎、赤羽操、上森大輔、後藤大治、宇田菊生、林煉、八木文子、柴山武矩）のうちの筆頭者である。

『黎明』創刊号⁶に以下のような話が載っている。

- ① 或る処で、火事があつてその家の鶏舎も焼けました。焼けあとをしらべてゐた家人が、一羽の牝鶏が伏したまゝ、焼け死んでゐるのを発見しました。ところがどうせう。その牝鶏の羽の下には、八羽の雛鳥が生き残つてゐたではありませんか。

家の人たちは、非常に心を打たれました。そして、深く感じました。『親鶏は自分の

⁵ 泉（2013）によると、「戦前台湾の社会教育における『国語教育』について、昭和期に関する研究は非常に乏しい。それ以上に、明治大正時代に関する研究は見かけない。」という。

⁶ 国立台湾図書館蔵本を利用した。

昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における
仮名導入前の日本語指導について

身を焼き殺しても雛鶏を助けるのだ、雛鶏がそれほどかはいゝのだ。鶏でさへあんなに可愛いがるものを、人間がこれを預かつたなら、もつともつと可愛がつてやらなければならない』

それから、本気に養鶏業をはじめて、今日では大成功をしてゐるといふことであります。その人は申します。『養鶏の秘訣はたつた一つだ。それは鶏を自分の子のやうにかはいがつてやることだ』

(黎明、創刊号、10頁下、昭和7(1932)年6月発行)

『新国語教本』(旧教本)にも以下のように似た話が載っている。

- ② 阿花さんはおかあさんと二人で、にはとりの卵をかへしました。かはいゝひなが八はかへりました。おかあさんも阿花さんも大そうよろこびました。朝早くから夕方おやどりがひなどりははねの下にかゝへてすの中にねむるまで、いろいろにはとりのせわをしました。』⁷

ところがある夕方阿花さんのふちゆういから、とり小屋に火がついて、みるみる中にやけてしまひました。おかあさんと阿花さんはきちがひのやうになつて、やうやく火をけすことが出来ました。しかしかはいさうにおやどりは、すの中にぢつとしやがんだまゝ、やけ死んでゐました。おかあさんがおやどりをのけて見ますと、その下には八はのひよこがみな生きて居りました。阿花さんはそれを見て大そうよろこびました。

けれどもおかあさんは泣いてゐました。おかあさんは、じぶんがやけ死んでも、ひよこをたすけたおやどりを、かはいさうに思つたのです。

(巻二、36課「おやどりとひよこ」、昭和8(1933)年12月発行)

このふたつの話の展開は完全に一致しているわけではない。ただ、「火事るとき親鶏が8羽の雛を助けて命を落とした」という骨子が共通している。偶然に似たような話を採用したとは考えにくい。『黎明』と『新国語教本』との接点になる加藤春城もいることなので、影響があったか、あるいは、関連があったと見るべきであろう。

3 『新国語教本』について

『新国語教本』は、昭和8(1933)年に全三巻として初めて刊行された。その後、昭和14(1939)年に全二巻として改訂される。本稿では、前者を『新国語教本』(旧教本)、後者を『新国語教本』(改訂版)とし区別できるように示したい。

書誌的な事柄を示すとともに、実際に使用した版について記すと以下のとおりである。

I 『新国語教本』(旧教本) 巻一 昭和8(1933)年12月4日第1版発行

⁷ 『新国語教本』は一字下げをしない形式なので、原文で文が最後まで来た次の行は、続くのか改行なのか判断できなくなる。そこで、「J」を用い改行であることを明示している。

著作者兼発行者 台湾教育会（代表者 三屋静）

印刷人 加藤豊吉

印刷所 小塚本店印刷工場

（「国立台湾図書館蔵本」〈昭和12年5月5日第9版〉を使用した）

Ⅱ 『新国語教本』（旧教本）巻二 昭和8（1933）年12月20日第1版発行

著作者兼発行者 台湾教育会（代表者 三屋静）

印刷人 加藤豊吉

印刷所 小塚本店印刷工場

（「国立台湾図書館蔵本」〈第1版〉を使用した）

Ⅲ 『新国語教本』（旧教本）巻三 昭和8（1933）年12月23日第1版発行

著作者兼発行者 台湾教育会（代表者 三屋静）

印刷人 青木崑

印刷所 盛文社

（「国立台湾図書館蔵本」〈昭和12年4月30日第4版〉を使用した）

この『新国語教本』（旧教本）巻一、巻二、巻三に対応する形で編まれた指導書が、『新国語教本教授書』全三巻である。

Ⅳ 『新国語教本教授書』巻一 昭和9（1934）年4月30日第1版発行

著作者兼発行者 台湾教育会（代表者 三屋静）

印刷人 青木崑

印刷所 盛文社

（「国立台湾図書館蔵本」〈第1版〉を使用した）

Ⅴ 『新国語教本教授書』巻二 昭和10（1935）年5月20日第1版発行

著作者兼発行者 台湾教育会（代表者 三屋静）

印刷人 吉村清三郎

印刷所 吉村商会印刷所

（「国立台湾図書館蔵本」〈第1版〉を使用した）

Ⅵ 『新国語教本教授書』巻三 昭和10（1935）年5月20日第1版発行

著作者兼発行者 台湾教育会（代表者 三屋静）

印刷人 吉村清三郎

印刷所 吉村商会印刷所

（「国立台湾図書館蔵本」〈第1版〉を使用した）

この後、昭和14（1939）年に『新国語教本』（改訂版⁸）巻一、巻二が改訂第1版として発行され、同じく昭和14（1939）年に『新国語教本』（改訂版）の指導書である『新国語教本教

昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における
仮名導入前の日本語指導について

師用』巻一、巻二が発行される。

4 『新国語教本教授書』について

『新国語教本教授書』の書誌的な点についてはすでに記したとおりである。この『新国語教本』（旧教本）の指導書である『新国語教本教授書』、あるいは『新国語教本教授書』を踏まえた『新国語教本教師用』（『新国語教本』〈改訂版〉の指導書）がもとになって、さらに詳細な「教授細目」や「指導細案」が作られ、台湾各地で実際に教えられた。「教授細目」や「指導細案」の研究のためにも、そのもととなった『新国語教本教授書』の内容を把握しておくことは重要である。

そこで、まず、「緒言」を掲げ、下線部を中心に解説する。

〈緒言〉

一、本書ハ新国語教本巻一ノ教授参考用ニ供センガタメ編纂シタルモノナリ。

一、本書ハ新国語教本ヲ使用シ約百二十時間ヲ以テ初步ノ国語教授ヲ為スモノト予定シ、卑近ナル単語及び基礎的表現形式ノ教授ニ四十四時間、教本ノ教材ハ片仮名ノ教授ニ二十時間、其ノ他ノ取扱ニ五十二時間ヲ充当セリ。但シ、以上ノ時間ハ寧ろ最短時間ヲ示セルモノナレバ、百三四十時間乃至百五六十時間ノ教授時数ヲ有スル所ニアリテモ、多少話方教材ヲ補足シ練習ヲ十分ナラシムレバ、毫モ教本教材ノ不足ヲ訴フルコトナカルベシ。

一、本書ハ国語教授ノ第一歩ヨリ国語ヲ以テ教授スル方針ヲ採リ、劈頭ニ掲グルニ学習用語並ニ訓練用語ヲ以テシタリ。

一、日常目撃セル事物ノ名称並ニ基礎的表現形式ノ教授ハ国語取得^(ママ)ノ根底ヲ為スモノナレバ、実物・絵画・身振・動作等ヲ利用シテ確實ニ教授シ、生徒ヲシテ咄嗟ニ発表シ得ルマデ十分ナル練習ヲ積マシメシムコトヲ要ス。

一、練習ニ於テ重ンズベキハ全生徒ニ対シナルべく多ク発表ノ機会ヲ与フルニアレバ、教授者ハ適宜斉唱ヲ利用スル共ニ、個人指名ノ遍^(ママ)セザルヤウ絶エズ周到ナル注意ヲ払フベシ。

一、本書ハ話方中心主義ヲ採リ、読方・書方等ハ之ト関聯シテ行ハシムルヤウ立案シタレバ、教本ノ範語ニヨリ片仮名文字ヲ教授スル場合モ、文字の読方・書方ノミニ拘泥スルコトナク、話方練習ノ間ニ於テ適宜之ガ指導練習ヲナサンコトヲ要ス。

⁸ 『新国語教本』（改訂版）巻二 昭和14（1939）年12月15日改訂第1版発行

著作者兼発行者 台湾教育会（代表者 加藤春城）

印刷人 田淵虎松

印刷所 田淵石版印刷所

（利用は「国立台湾図書館蔵本」〈改訂第1版〉による）

- 一、文字ハ教本ノ取扱ニ入り範語ニヨリテ教授スルヲ原則トナセドモ、市街地等ニテ最初ヨリ多少国語ヲ理解スルモノ相当数アルトキハ、表現形式指導ノ途中ニ於テ臨機一字ヅツ其ノ読方・書方ヲ授ケ置クモ可ナリ。
- 一、教本ノ取扱ガ文ノ形ヲ提示セル所ニ至リテモ、其ノ教授ハ話方ヲ主体トシ、之ニ融合セシムルヤウ読方・書方等ノ取扱ヲナサンコトヲ望ム。
- 一、教本教材ニ関聯セル話方教材ハ処々ニ具体的ノ実例ヲ掲ゲタレドモ、教授者ハ土地ノ事情ト生徒ノ程度ニ応ジ適當ニ之ヲ補充センコトヲ要ス。
- 一、教本教材ノ確実ナル取得ヲ期スルト共ニ教授力ヲナルベク経済的ナラシメンガタメ、話方教材ハ主トシテ教本ニ関聯セルモノヲ採用センコトヲ望ムト雖モ、生徒周辺ノ活材料ニヨリナルベク自由ノ会話ヲ試シシムルコトハ、国語力向上ニ奏スルコト多大ナルモノアレバ、適宜是等ノ教材ヲ構成シ隨時挿入シテ練習セシムベシ。
- 一、教本ハ初歩ニ於ケル国語教授ノ教材ノ標準ヲ示セルモノナレバ、教授者ハ単ニ之ガ読方・話方ノ成績上レルヲ以テ満足スルコトナク、絶エズ生徒ノ理解力・発表力ニ注意シ、殊ニ生徒ガ自発的ニ応用セントスル努力ノ有無ニ注目センコトヲ望ム。
- 一、的確ナル理解ト十分ナル練習ハ国語教授ニ於テ特ニ重ンズベキコトナレドモ、熱心ノ余リ練習ガ往々機械的ニ流ル、トキハ生徒ノ倦怠ヲ招キ易キモノナレバ、常ニ周到ナル準備ト機敏ナル取扱トニヨリカメテ学習ノ興味ヲ持続セシムルヤウ工夫センコトヲ要ス。国語教授ノ巧拙ハ主トシテコノ点ニアリ。本書ハ之ニツキ出来得ル限り適當ノ示唆ヲ与ヘンコトヲ力メタリ。
- 一、本書ハ以上ノ如キ趣旨ニ依リ編纂シタルモノナレドモ、国語教授ノ如キ複雑ナル實際的処置ヲ要スルモノニアリテハ、其ノ方法多種多様ニシテ勿論本書記載ノ要領ニ限ラル、モノニ非ズ。教授者各自ノ適切ナル工夫アランコトヲ望ム。

昭和九年三月

台湾教育会

『新国語教本』（旧教本）は、初めから「アメ ミノ カサ カラカサ」（1頁）のように片仮名が現れる教科書である。ただ、『新国語教本教授書』では、『新国語教本』（旧教本）になり17課分が冒頭にあり、その後第18課で『新国語教本』（旧教本）第1課の解説となっている。つまり、仮名導入前に17課分の日本語指導がある。あわせて44時間である。「緒言」で「卑近ナル単語及ビ基礎的表現形式ノ教授ニ四十四時間」とあるのがこれに相当する。「本書ハ話方中心主義ヲ採リ」とあり、話方の指導に重点を置いていることとも関連している。昭和8（1933）年発行の『新国語教本』（旧教本）だけでは、話方重視の詳細は分からないので、昭和9（1934）年から昭和10（1935）年にかけて出された『新国語教本教授書』の緒言の記述を詳細に読み解くことは重要である。さらに、以下に述べる実際の仮名導入前17課分

昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における
仮名導入前の日本語指導について

の日本語指導案を見ると話方重視は明白である。この『新国語教本教授書』の傾向が、後に昭和14（1939）年『新国語教本』（改訂版）が発行される際に影響を与えたと考えられる。

『新国語教本』（改訂版）の冒頭を見ると、第1課から第9課まで仮名はなく、絵のみであり、仮名が導入されるのは第10課からである。まさにこれは、『新国語教本教授書』の日本語指導案を踏襲したものである。

5 仮名導入前の日本語指導

5-1 第1課から第17課までの全体像について

第1課は「学習訓練用語」である。第2課から第6課までは、「コレ・ソレ・アレ」を中心に学ぶ。第2課「コレ」、第3課「ソレ・アレ」、第4課「コレ・ソレ・アレ、肯定・否定」、第5課「ドレ」、第6課「コレ・ソレ・アレ、疑問」と続く。第7課は「形容詞・形容動詞の連体形」に関するもので、第8課は「氏名と敬語」に関するものである。第9課で「コノ・ソノ・アノ」、第10課「準体助詞ノ」、第11課「ココ・ソコ・アソコ、アリマス」、第12課「ココ・ソコ・アソコ、キマス」となっている。第13課「〇〇ト〇〇ガアリマス、〇〇ト〇〇ガキマス」、第14課「〇ハココニアリマス、〇ハソコニキマス」、第15課「葱ハ大根ノ右ニアリマス、岩ノ下ニ蟹ガキマス」、第16課「コチラ・ソチラ・アチラ、キル・アル」というように既習項目を積み重ねている。第17課では「私ハ歩イテキマス、阿仁サンガ喜ンデキマス」の形まで学ぶ。

単純化すると、「コ・ソ・ア」と「アリマス、キマス」の使い分けに重点を置いた日本語指導がなされているといえる。こ2項目とも世界の言語の中で日本語に特徴のある使い分けがなされるものである。台湾語においても日本語のような使い分けは見られないため、時間をかけて詳細に教える必要がある。

以上が、仮名導入前の日本語指導についての全体像である。以下、17課のうちの特徴的な3課分（第1課、第7課、第8課）について詳細に提示し、指導の特徴について考察する。

5-2 第1課「学習訓練用語」について

第1課（2時間分）の本文（1～3頁）を示すと、以下のようになる。

一 教材（学習訓練用語）

◇ {先生 皆サン}⁹ 今晚ハ。

◇ 〇〇サン…………ハイ

オ立チナサイ。…………レイ。

オカケナサイ。

⁹ 並列

〈中略〉

〇〇サン、今晚ハ。……今晚ハ。

口ヲオアケナサイ。

ハツキリオイヒナサイ。

ユツクリオイヒナサイ。

一シヨニオイヒナサイ。

ヨクオキキナサイ。

先生ノ口ヲゴランナサイ。

〈中略〉

〇〇サン、イツテゴランナサイ。

ヨクデキマシタ。オ上手デス。

〈中略〉

◇ {先生 皆サン} サヤウナラ。

これに対する「指導要領」（3頁）は以下のとおりである。

- (1) 系統的に順序よく動作しつゝ聴かせる。
- (2) ◇を附してある教材は発表せしめ、その他の教材は聴方及び動作に止める。

さらに「指導上の注意」（4頁）は以下のとおりである。

- (1) 入所当初の学習訓練用語として主として聴方に止めるものであるが、聴くことによつて機敏に動作が伴ふやうに指導する。
- (2) 姓名の国語読みに早く馴れさせて、自己の姓名と国語音が合致するやうに指導する。
- (3) 挨拶は指導者のみに止まらず、生徒相互間にも行はしむるやうに導く。
- (4) 挨拶の際の作法については初は寛大に、漸次徹底を期し¹⁰なくてはならない。
- (5) 本指導は二時間を配当せしも、何れの時間に於ても繰返して指導する。

挨拶が「今晚ハ」「サヤウナラ」のみであるのは、夕方（夜間）から授業が始まる国語講習所ならではのものである。「先生ノ口ヲゴランナサイ」という学習訓練用語は、日本語母語話者であれば必要ない場合もあるであろうが、日本語の非母語話者には必要である。「〇〇サン」と3回も呼びかける例が提示されている。これは「指導上の注意」に、「姓名の国語読みに早く馴れさせて、自己の姓名と国語音が合致するやうに指導する」とあることから、何回も何回も名前を呼んで慣れさせるためであると考えられる。

¹⁰ ママ

5-3 第7課「形容詞・形容動詞の連体形」について

第7課（3時間分）の本文（22頁）を示すと、次のようになる。

表現形式 {コレ ソレ アレ} ハドンナ○デスカ。

……… {コレ ソレ アレ} ハ○○ {イ ナ ノ} ○デス。

これに対する「指導要領」（22～24頁）は以下のとおりである。

- (1) 相対する事物を直観せしめ新形式に対する耳馴しをする。

コレハ竹デス。{コレハ長イ竹デス。 コレハ短イ竹デス。}

コレハ布巾デス。{コレハキレイナ布巾デス。 コレハキタナイ布巾デス。}

コレハ紙デス。{コレハ新シイ紙デス。 コレハ古イ紙デス。}

- (2) 命令法によつて動作させる。

○○サン、{長イ竹 短イ竹} ヲ持ツテオイデナサイ。

………コレハ {長イ竹 短イ竹} デス。

○○サン、{古イ紙 新シイ紙} ヲ持ツテオイデナサイ。

………コレハ {古イ紙 新シイ紙} デス。

○○サン、{キレイナ布巾 キタナイ布巾} ヲ持ツテオイデナサイ。

………コレハ {キレイナ布巾 キタナイ布巾} デス。

- (3) 話方

(イ) 談話として

{コレ ソレ アレ} ハ {古イ紙 紫ノ花 キレイナ布巾} デス。

(ロ) 会話として

{コレ ソレ アレ} ハドンナ {紙 花 布巾} デスカ。

……… {コレ ソレ アレ} ハ {古イ紙 紫ノ花 キレイナ布巾} デス。

「指導上の注意」（24～25頁）としては以下のとおりである。

- (1) 「長イノ竹」「ムラサキ花」「オホキイナ箱」「キタナイナ布巾」「赤イノ花」に陥らぬやう相互の形式を十分練習せしめる。
- (2) 語の結びつきに注意させ語彙拡充に努める。
- (3) 「コレガ長イ竹デス。」等既習の選出形式を第二・第三次に加味する。

「指導上の注意」に「語の結びつきに注意させ語彙拡充に努める」とあるように、意味のつながりを重視して対やセットになる語を提示している。色名、綺麗、汚い等間違いやすい形式が頻出する。「ムラサキ花」のように「ノ」が必要なところに入れなかったり、「長イノ竹」「赤イノ花」のように「ノ」が不要なところに「ノ」を加えた例が誤用危惧例として挙げられている。「オホキイ箱」「オホキナ箱」が混交したような「オホキイナ箱」、「ナ」が不要なところに「ナ」を加えた「キタナイナ布巾」（対の意味となる「キレイナ布巾」からの類推か）とい

う誤用危惧例も載せている。

5-4 第8課「氏名と敬語」について

第8課（2時間分）の本文（25頁）を示すと、次のようになる。

表現形式 アナタハドナタデスカ。……私ハ〇〇デス。

アナタハ〇〇サンデスカ。{ハイ、サウデス。 イ、エ、チガヒマス。}

発音 ドナタデスカ。

「指導要領」（25～26頁）は以下の通りである。

- (1) 人名点呼をなしつゝ明瞭に返事をさせる。

陳氏月サン……ハイ、アナタハ陳氏月サンデス。

張氏金サン……ハイ、アナタハ張氏金サンデス。

- (2) 人名点呼の後各自の氏名を発表させる。

私ハ陳氏月デス。

私ハ張氏金デス。

- (3) 話方

(イ) 会話として

アナタハドナタデスカ。私ハ陳氏月デス。

アナタハ張氏金サンデスカ。……イ、エ、チガヒマス。

アナタハドナタデスカ。私ハ陳氏月デス。

アナタハ張氏金サンデスカ。……ハイ、サウデス。

張氏金サン……ハイ。

- (4) 発音指導 今後は氏名中発音困難なものを摘出して行ふ。

「指導上の注意」（26～27頁）は以下のとおりである。

- (1) 本島の家庭では本名以外に所謂通称を使用してゐる。又氏名の呼び方が不正確なものが多い。正確な戸籍上の氏名を知らしめ、国語読みを指導し馴れさせ、自己の氏名をとほして国語音に親しませる。
- (2) 「〇〇サン」の敬称の使用がなかなか困難である。「サン」の敬称を自分の氏名的一部分だと心得て自分の氏名をいふのに「サン」を付する者があるから注意を要する。それと共に敬称による国語の味を知らしめるやう、指導者は常に敬称使用に留意する。
- (3) 「アナタハダレデスカ。」の形式に替へてもよいが、「ドナタ」と発問した方が無難である。長上に対する言語指導から考へても是非本形式によりたい。
- (4) 「アナタハ〇〇サンデスカ。」の発問形式は不自然になり勝ちであるから注意する。

昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における
仮名導入前の日本語指導について

第1課でも姓名(氏名)については触れられており、既に述べたとおりである。第8課では、「本名以外に所謂通称を使用してゐる」ことが述べられ、「氏名の呼び方が不正確なものが多い」と指摘している。さらに「『サン』の敬称を自分の氏名的一部分だと心得て自分の氏名をいふのに『サン』を付する者があるから注意を要する」という。

敬語に関連して、第9課の「指導上の注意」(30頁)にも関連した記述があるので補足しておく。ここでは、「{|コノ ソノ アノ 人| と替へて表現せしめるのもよいが、本島では他人に対する言語が不躰になり勝ちであるから『コノ方』と指導すべきである。」「{|コレ ソレ アレ| ハ○サンデス。』の形式に陥らないやうに注意する。」というように述べられている。

6 仮名導入後(第18課～)の指導

『新国語教本教授書』第18課は『新国語教本』(旧教本)巻一の第1課「アメ ミノ カサ カラカサ」(1頁)に対応している。これ以降仮名が導入され、『新国語教本教授書』巻二、巻三に連なる文字の指導が始まる。本稿では、仮名導入前に焦点を当てているため、参考までに挙げるにとどめる。「指導上の注意」(64～65頁)には以下のように述べられている。

- (1) 五十音文字指導の最初である。今迄表現形式習得中に言葉として耳馴しはしてあるものの、文字指導に際しては必ず「雨・蓑・笠・傘」の確たる観念を形成しておかねばならない。
- (2) 既習形式によつて聴かしめ、話させるのも要は本教材に対する明確なる概念を構成するに外ならない。
- (3) 最初「ア」の発音「メ」の発音を明確にし「ア・メ」を連絡して発音せしめる。発音の際は大声を出させたり、不自然な発音をさせたりしないやう緩かに明瞭に発音させるやう指導する。斉唱よりも個唱に重きをおき、なるべく全生徒にわたつて指名する。
- (4) 発音が出来たら文字指導に移る。此の時特に文字が発音を表はす符号であることを知らせる。例へばアは雨のアとして指導する。
- (5) 文字は一字宛運筆の順序、字形を正しく会得せしめる。特に講習生は年齢の関係から字形は早く会得するも、運筆・筆順が之に伴はない者が多いから注意を要する。
- (6) 「アメ／ミノ／カサ／カラカサ」と連続して書かせる時は二字又は四字の大きい(ママ)さ、字間の隔りに留意させる。
- (7) 文字の書方練習の時は方眼紙を謄写し、方眼紙内の最初の二字位は点線文字として文字の結構を知らしめるがよい。

此の際机間巡視により個人的に筆順、字形の整正等に留意し、批正して迅速に書く

施を与へる。

7 まとめと今後の課題

昭和9～10年にかけて台湾で刊行された『新国語教本教授書』における仮名導入前の日本語指導案44時間分について見てきた。全体的に、台湾語にはない「コ・ソ・ア」と「アリマス、キマス」の使い分けに重点を置いた日本語指導がなされている。「挨拶の仕方」「形容詞・形容動詞の連体形」「氏名と敬語」を扱った課については、詳細に「本文」「指導要領」「指導上の注意」を掲げ、第二言語教育を行う上での問題点の把握と対処法を窺った。

『新国語教本教授書』は『新国語教本』（旧教本）の指導書である。『新国語教本』（旧教本）に影響を与えたものとして、従来、台湾の『国語読本（国民読本）』や内地『国定読本』、朝鮮『国語読本』とほぼ同じ内容の課があることが知られていた。本稿では、これに加えて、『新国語教本』（旧教本）に影響を与えた可能性がある『黎明』の本文を示すことができた。まだほんの一端に過ぎないが、今後、数多くの類似話が発見されれば、『新国語教本』（旧教本）の成立に関する通説も変わってくる可能性がある。類似話の探索は、今後の課題である。

また、『新国語教本教授書』における仮名導入前日本語指導の徹底は、『新国語教本』（旧教本）を改訂し、『新国語教本』（改訂版）とする際に、初めの方の課に仮名を導入しないという点で受け継がれている。このほかにも本文で掲げた『新国語教本教授書』の記述をもととして、『新国語教本教師用』や各地の「教授細目」「指導細案」が作られている。

おもとなとなっている『新国語教本教授書』を確認しておかないと、昭和9年以降に刊行される「教授細目」や「指導細案」の記述がオリジナルなものか、『新国語教本教授書』の影響を受けたものかが判別できない。本稿での基礎的な研究を踏まえ、今後は、『新国語教本教授書』に依拠しつつさらに詳細に教授案を練った「教授細目」や「指導細案」に見られる日本語の考察を行う予定である。

参考文献

- 揚妻祐樹（2012）「台湾教育会編『國光』について」『藤女子大学国文学雑誌』87
- 泉 史生（2013）「戦前台湾の社会教育における日本語教育—簡易国語講習施設で使われた教材の研究—」『日本語・日本語教育の研究—その今、その歴史—』スリーエーネットワーク
- 園田博文（2012）「明治28年刊台湾語会話書の植物語彙に関する一考察—『台湾語集』『台湾言語集』『台湾会話編』『台湾語』を中心に—」『近代語研究』（武蔵野書院）

昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における
仮名導入前の日本語指導について

- 園田博文（2019b）「昭和初期台湾における日本語教育月刊誌『薫風』『黎明』『国光』について—青年劇と地震の記事を中心に—」『近代語研究』（武蔵野書院）21
- 園田博文（2020）「台湾の日本語教育月刊誌『国光』（昭和7年創刊）における投稿文の資料性—誤用と誤文訂正を中心に—」『論究日本近代語』（勉誠出版）1（印刷中）
- 陳 虹彬（2006）「日本統治下台湾における国語講習所用国語教科書の研究—台湾教育会の『新国語教本』に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』54-2
- 陳 虹彬（2019）『日本統治下の教科書と台湾の子どもたち』風響社
- 藤森智子（2016）『日本統治下台湾の「国語」普及運動—国語講習所の成立とその影響—』慶應義塾大学出版会
- 吉岡英幸（2012）「『台湾総督府日本語教材集』解説」『台湾総督府日本語教材集 第一巻』冬至書房

謝 辞

本研究は、JSPS科研費、基盤研究（C）「明治以降昭和20年までの台湾語会話書および台湾における日本語教科書の研究」（JP18K00707）（研究代表者：園田博文）の助成を受けたものです。資料調査の際は、国立台湾図書館（新北市中和区）の方々にお世話になりました。また、英文要旨作成に当たっては石崎貴士先生にご助言いただきました。記して謝意を表する次第です。

Japanese Language Instruction Before the
Introduction of Kana: As Seen in the Early Showa
Period *Xinguoyu jiaoben jiaoshoushu*
Published in Taiwan
Hirofumi SONODA

This paper focuses on the *Xinguoyu jiaoben*, a textbook for Japanese language learning centers, as well as its teacher's manual. My aim was to elucidate the process by which these came into existence as well as their influence on subsequent textbooks. In the course of my survey I found *Liming's* text, which influenced this textbook, and found that upon revision, its revised edition did not use kana at the beginning part because the introductory training without kana had already been recommended from the first edition. This paper includes many concrete examples (such as how to provide instruction regarding Japanese phrases that do not exist in Taiwanese) of how Japanese was explained in an easy-to-understand manner.